

激戦!

塾・予備校

小学校低学年向けの算数教室に注目が集まる。

JR広島駅に近い学習塾「鯉城学院広島校」では、週1回の「算数オリンピック」数理教室アルゴクラブ」を9クラス開講している。幼稚園年長組から小学3年生までが主な対象で、学年によるクラス分けはない。平面や立体を数分以内で決められた形に並べる数理解パズル、数字のカードを当てる推理ゲームなど、8種類のメニューを90分間で次々にこなす。

4人1組でテーブルに座り、木製の立体パズルを組み立てる約20人の子供たちの表情は、真剣そのもの。完成するたびに「できた」と元気な声がかかります。4人は、時には協力してパ

教育ルネサンス

No.786



数字のカードを当てる推理ゲームを楽しむ子供たち（鯉城学院広島校で）＝前田尚紀撮影



低学年から思考力鍛錬

ズルを解き、時にはゲームで対戦する。子供たちは授業中、飽きる様子を一度も見せなかった。

その一人、三浦裕太郎君(9)(小3)は「算数のパ

ズルは難しいけど面白い。母親の敦子さん(35)は「もともとパズルは好きでしたが、アルゴクラブに入ってから、試行錯誤する力がついてきたみたい」と目を細めた。

塾で中学受験向けの勉強が始まるのは、計画的な勉強に必要な集中力が身についてくる小学4年以降が普通だろう。ただ「知識をしっかりと身につけるには十分な時間も必要」というのが、高学年向けの授業を低学年で先取りする塾の一般的な

*

考え方だ。

しかし、同学院の角谷勝己学院長(48)は「低学年では、知識より考える癖や集中力を身につけた方が、高学年になってからも伸びると考えていた。ただ、それに適した低学年向けの学習法が見つからなかった」。

2005年に始まったアルゴクラブを知ると、すぐに採用を決定。翌春に開いた授業の体験会は、予想の2倍となる約200人が集まった。

「今の親は子供の時、塾で計算力を鍛えた世代。自分の経験から、計算力が学力のすべてではないと気づいている。一人っ子が多くなり、親の塾への目も厳しく、子供の学力を伸ばす塾を必死に探している」

*

06年に実施された経済協力開発機構(OECD)の

国際学習到達度調査(略称PISA)でも、日本の子供たちの「科学的応用力」や「数学的応用力」の順位が下がるなど、考える力の不足が指摘された。こうした学力への親の不安感も、アルゴクラブの人気を後押ししているようだ。

中学受験の大手、四谷大塚(東京)も4月から、都内などの6校舎で開講を決めた。山本利行情報本部長(54)は「1999年に低学年を対象に知能開発を進める『リトルスクール』を作った。高学年までの一貫指導をめざす塾の理念にも合う」と説明する。アルゴクラブは塾の利点として、低学年の子供が確保できることもうたっており、塾の狙いと一致した形だ。

誕生してまだ3年ほどのパズル型低学年教育が、受験学力だけでなく、人生の糧となるような思考力、発想力を育てることができるとの。真価が問われるのはしばらく先のことになる。(宮崎敦)